

歴史としての建築

第1部 日常を支える秩序

- 歴史の連続性
- 時代精神という観念
- 「3.11以後」の意味
- 常にあったもの
- 生きる環境の連続と変化

PROFILE

香山壽夫 (こうやま・ひさお)

1937年東京生まれ。1960年東京大学卒業、64年から66年にかけてペンシルベニア大学に留学し、ルイス・カーン、ロバート・ヴェンチューリらに学ぶ。その後、建築家としての活動とともに、九州芸術工科大学、東京大学、明治大学、放送大学、聖学院大学などで教育・研究活動に従事。彩の国さいたま芸術劇場（1994）で日本建築学会賞作品賞を受賞。

インタビュー＆構成＝長島明夫 ※編集協力＝古川 涼（工学院大学大学院）



歴史の連続性

——いま日常生活を送っていて、様々な場面で（歴史的感受）が希薄になってきている気がしています。昔の人だったら、そんなことをしたらはしたないとか、お天道様が見ているとって憚られるようなことでも、「今、ここ」でよければ構わないという態度をよく目にします。「今、ここ」が歴史的な連続から断絶して、断片化、絶対化している。歴史は頻繁に語られますが、単に自己の主張を正当化する理屈として用いられることが多いように思います。それが政治の領域などでもかなり切実な問題ではないかと感じていて、歴史特集を組むことにしました。建築をめぐる歴史を考えることが、現実に対して一つ有効なのではないかと思ったわけです。

そんなことを考えていた時、五年前のインタビューが収録された先生の新聞をいただいたんです[*1]。その後書きで、まさに歴史の連続性のことが書かれていた。

香山——「一発の銃声で歴史が変わった」

とか、「一枚のドローイングで近代建築の歴史が開いた」といったよく耳にする

言い方は、こうした浅薄な理解の代表だ。

私達は、歴史や評論の中で、何度こうした言い方を聞かされてきたことだろう。それは全く間違っただけだ。たとえ一発の銃声で革命の戦いの火ぶたが切られたとしても、その前に長い長い準備の時があり、革命戦の後には又長く苦しい反動の時が続くのだ。



その全体を、すなわち社会と歴史の全体を、数式のように、明快に説明することはあり得ない。近代のいくつかのそうした空しい試みを知った私達は、それは全くの間違いだと、今や断言してい

いだろう。

その理由は、経験と感覚というひとつのゆるぎない地盤に立つてみれば、明確である。歴史とは、私達のいのちがそうである如く連続的なものであり、そしていのちがそうである如く、常に複雑と対立に満ちているものだからだ。それがあからこそ、歴史は、そして私達のいのちは、混沌と渦巻きつつ、流れ動き続いているのだ。（香山壽夫『プロフェッショナルとは何か』p217）

もちろん先生は以前からずっとこういったことを仰っていたと思うのですが、今回個人的に特別な巡り合わせも感じるので、これはぜひまた先生にお話を伺おうと思った次第です。

この特集で〈歴史的感受〉と言う時に根拠にしているのは、T・S・エリオット（1898-1962）の「伝統と個人的な才能」

（1919）です。一〇〇年近く前の論文ですが、いま読んでみても非常に面白い。ただ、先生によれば、ヴェンチューリ（1925）もエリオットは好きだったと。まさかと思って『建築の多様性と対立性』（1966）[*2]を開いてみたら、見事に冒頭で「伝統と個人的な才能」が引かれていました。かつて読んだはずが、すっかり記憶から抜け落ちていたわけです。でもエリオットと香山先生と、この特集で別々に考えていたつもりが、ヴェンチューリという人を介して不意に結びつく、そういうこと

[*2] 邦訳＝ロバート・ヴェンチューリ『建築の多様性と対立性』伊藤公文訳、鹿島出版会、1982

[*1] 香山壽夫インタビュー「建築にしかなないこと」『建築と日常』No.0、2009（所収＝香山壽夫『プロフェッショナルとは何か——若き建築家のために』王国社、2014）